

エジプト・ギリシア・近代ヨーロッパ —『黒いアテナ』論争のこれから—

中澤 務*

Egypt, Greece and Modern Europe:
New Possibilities of the Black Athena Debate

Tsutomu NAKAZAWA*

[Abstract]

In this essay I further discuss the 'Black Athena Debate' which has been carried on since the publication of Martin Bernal's first volume of *Black Athena* (1987). This debate is mainly concerned with problems of image formation in 19th century Europe regarding ancient Greek civilization and the influence of Egypt and the Near East. To investigate new possibilities in this debate, I discuss a new study, the *African Athena: New Agendas* (2011), and examine new points of view developed in this book that show how history has been revised to ignore African (and Semitic) contributions to Greek culture.

1 はじめに

ロンドン生まれの中国学者で、『黒いアテナ』論争を引き起こした、コーネル大学名誉教授のマーティン・バナルが、2013年6月に76歳で亡くなった。『黒いアテナ』第1巻が刊行されてから27年の間、彼はつねに論争を続け、西洋古代史の歴史理解をめぐり、大きな影響を与え続けてきた。彼の投げかけた批判は、非常に重要な意味を持っており、その可能性はいまだに色あせていない。

本報告では、ひとつの節目を迎えたこの論争を振り返り、それが今後の展開に対して持つ可能性を、最近の研究成果を振り返ることによって、考えることにしたい。まず、2では『黒いアテナ』論争の概要を簡単にまとめる。続く3では、最新の批判的研究である論文集 *African Athena: New Agendas*¹ を取り上げ、その内容を詳しく紹介するとともに、そこから読みとれるこの論争の新たな可能性を探っていくことにしたい。

* 関西大学文学部 (Faculty of Letters, Kansai University, Japan)

1 D. Orrells, G. K. Bhambra, and T. Roynon (eds.), *African Athena: New Agendas*, Oxford, 2011.

2 『黒いアテナ』論争とその後²

『黒いアテナ』の主張

マーティン・バナールの著書『黒いアテナ(*Black Athena*)』は、1987年に第1巻³が刊行されるや否や、ヨーロッパを中心にセンセーションを巻き起こし、大きな論争に発展した。それは、単に学術的な論争というよりは、ヨーロッパの政治的イデオロギーをめぐる論争でもあった。というのも、この著書では、19世紀の近代ヨーロッパにおいて登場した、古代ギリシアの起源をめぐる説明は、ヨーロッパの白人中心主義によって捏造されたものだと言主張されていたからである。

バナールは、古代ギリシア文明の歴史的起源の説明として、3つの「モデル」を提示する。すなわち、「古代モデル」「アーリア・モデル」「改訂版古代モデル」である。「古代モデル」とは、古代ギリシア人たちが自分たちの歴史的起源として想定していた説明であり、それによれば、彼らは自分たちの文明がエジプトおよび近東の先進文明による植民地化の過程を経て形成されたとみなしていた。これに対して、「アーリア・モデル」は、近代ヨーロッパで生じた説明である。近代ヨーロッパの学者たちは、古代ギリシア文明は、エジプトや近東の文明の影響からは独立的に形成され、発展したものであり、そのような独自の文化を創ったのは、白人のアーリア人種であったと主張する。バナールは、このような「アーリア・モデル」は、近代ヨーロッパの捏造物であり、実際には「古代モデル」のほうが真実に近いと主張する。そこで彼は、この「古代モデル」の不完全な部分を修正し、外からの文明の影響の年代を修正した「修正版古代モデル」を正しい説明として提唱したのである。

このような彼の主張は、単に歴史的な学説をめぐるものではなく、ヨーロッパの歴史学のイデオロギー性を厳しく批判するものでもあった。バナールは、19世紀に生じた「古代モデル」から「アーリア・モデル」への転換は、なんら客観的な証拠にもとづくものではなく、ヨーロッパ人たちの抱いていた偏見、すなわち白人中心主義とそれにもとづいたアジア・アフリカ文明への蔑視にもとづくものであると断じ、それを批判したのである。バナールが第1巻で主題としたのは、このようなヨーロッパでの「アーリア・モデル」の形成の過程であった。

その後、バナールは、第1巻での主張を補完するための議論として、1991年に第2巻⁴、2006年には第3巻⁵を刊行する。第2巻では、内容はより歴史学的なものとなり、彼は、「改訂版古代モデル」の優位性を示すために、さまざまな歴史的資料から、学術的な証拠を示そうとしている。第3巻では、

2 『黒いアテナ』論争のより詳しい内容については、中澤務「歴史記述とパラダイム—『黒いアテナ』論争をめぐる一」、『Semawy Menu』4 (2012)、105-115を参照してほしい。

3 Martin Bernal, *Black Athena The Afroasiatic Roots of Classical Civilization Vol. 1: The Fabrication of Ancient Greece 1785-1985*, Rutgers U.P., 1987 (マーティン・バナール著、片岡幸彦監訳『ブラック・アテナ 古代ギリシア文明のアフロ・アジア的ルーツ I. 古代ギリシアの捏造 1975-1985』、新評論、2007年)。

4 Martin Bernal, *Black Athena The Afroasiatic Roots of Classical Civilization Vol. 2: The Archaeological and Documentary Evidence*, Rutgers U.P., 2002 (マーティン・バナール著、金井和子訳『黒いアテナ 古代文明のアフロ・アジア的ルーツ II. 考古学と文書にみる証拠』上・下、藤原書店、2004年)。

5 Martin Bernal, *Black Athena The Afroasiatic Roots of Classical Civilization Vol. 3: The Linguistic Evidence*, Rutgers U.P., 2006.

同様の趣旨から、古代ギリシア語と、周辺地域の諸言語の間の関係性が言語学的考察をもとに議論されている。

『黒いアテナ』論争の展開

『黒いアテナ』第1巻刊行後、すぐに、バナールに対する批判が始まった。当初、盛んに批判されたのは、バナールの歴史学的・言語学的知識の不十分さであった。批判者たちは、バナールが依拠する考古学的証拠や、歴史的文書に対するさまざまな誤解を指摘したのである⁶。確かに、バナール自身も認めているように、中国学者であったバナールにとって、古代史や古典文献学は専門外であり、実際、彼の議論の中には、さまざまな誤りが含まれている。しかし、これについては、彼は、多くの誤りを認め、訂正している。

むしろ、重要な点は、そのような細かい部分よりもむしろ、彼が、歴史的理論を明らかにした点にある。実際、この部分に対しては、批判は限定的なものに留まっているのである。すなわち、19世紀の学会の論争に対するバナールの認識は、事実誤認も多く含まれるものの、全体としてみれば、彼が主張するような傾向があったことは否定できないのである。

現在では、論争が開始されてから27年あまりになるが、論争が一段落した二十世紀終りから、『黒いアテナ』に対する態度は、次第に変化してきた。学問的な信憑性をめぐる論争が一通りの決着を迎えることにより、人々の目はむしろ、この著作が孕むより広い可能性に向けられるようになってきたのである。この動きは、刊行20年を過ぎた2000年代後半から顕著になっており、この時期に、『黒いアテナ』を新たな視点から再評価しようとする動きが起こってきた。

次章では、このような再評価の中で、最も注目すべき研究の内容を紹介し、これをもとに、『黒いアテナ』の今後の展開を考えてみたい⁷。

3 *African Athena: New Agendas*

African Athena: New Agendas は、2008年11月に英国ウォーリック大学で開催された国際会議「アフリカのアテナ：『黒いアテナ』の20年 (*African Athena: Black Athena Twenty Years On*)」の成果をまとめた論文集であるが、『黒いアテナ』の主張の妥当性を検討したものではなく、むしろ、副題が示すように、バナールの主張が持つさらなる生産的な可能性を、新たな視点から探求しようとしたものといえる。そのさい、特徴的なのは、とりわけアフリカおよび黒人との関連を視野に入れ、バナールの視点が、特に現代アメリカとヨーロッパにおけるアフリカと黒人をめぐる問題にどのような可能性を持つ

6 代表的な批判として、M. R. Lefkowitz, G. M. Rogers (eds.), *Black Athena Revisited*, University of North Carolina Press, 1996, M. R. Lefkowitz, *Not out of Africa: How "Afrocentrism" Became an Excuse to Teach Myth as History*, Basic Books, 1996などを挙げることができる。バナールは、前者の批判に答える、大部の著作を発表している。Martin Bernal, *Black Athena Writes Back*, Duke, 2001(金井和子訳、『黒いアテナ』批判に答える』(上・下)、藤原書店、2012)。

7 このほか、注目すべきものとして、Wim van Binsbergen (ed), *Black Athena Comes of Age: Towards a Constructive Re-assessment*, Lit Verlag, 2011を挙げることができる。

かを、極めて多角的な視点から考察しようとしている点である。

このような視点から、本論文集は二つの大きな表題のもとに分類されている。以下、簡単にその概要をまとめておこう。

第一部「神話と歴史学：古代と現代」

第一部は、「神話と歴史学：古代と現代 (Myths and Historiographies, Ancient and Modern)」と題され、主に歴史学的な視点から論じた 10 編の論文が収録されている。収録論文は、以下の通りである。

- (1) Maghan Keita, "Believing in Ethiopians."
- (2) Patrice D. Rankine, "Black Apollo? Martin Bernal's *Black Athena: The Afroasiatic Roots of Classical Civilization*, Volume iii, and Why Race Still Matters."
- (3) Partha Mitter, "Greece, India, and Race among the Victorians."
- (4) Margaret Malamud, "Black Minerva: Antiquity in Antebellum African American History."
- (5) Kenneth W. Goings and Eugene O'Connor, "Black Athena before *Black Athena*: The Teaching of Greek and Latin at Black Colleges and Universities during the Nineteenth Century."
- (6) Robbie Shilliam, "Ethiopia Shall Stretch forth her Hands unto God': Garveyism, Rastafari, and Antiquity."
- (7) Anna Hartnell, "Between Exodus and Egypt: Israel-Palestine and the Break-up of the Black-Jewish Alliance."
- (8) Toby Green, "Beyond Culture Wars: Reconnecting African and Jewish Diasporas in the Past and the Present."
- (9) Stephen Howe, "Egyptian Athena, African Egypt, Egyptian Africa: Martin Bernal and Contemporary African Historical Thought."
- (10) Robert J. Young, "The Afterlives of *Black Athena*."

これらの論文において主に考察されているのは、古代のアフリカと地中海地域をめぐる歴史的概念と、現代におけるアフリカ理解との密接な関係性であり、『黒いアテナ』から派生する多様な問題が指摘されている。以下、その概要を見ていこう。

まず、(1)～(3)では、『黒いアテナ』の議論が孕む問題、とりわけ人種概念の形成に関わる問題が、広い視点から考察されている。(1)は、アメリカにおける歴史学がアフリカをどのように捉えてきたかをテーマとし、初期の時代から、アメリカの学会に存在していた人種主義的な歴史や科学概念との間に繰り広げられた論争が分析されている。(2)は、これまであまり注目されてこなかった、『黒いアテナ』三巻におけるアポロン神の歴史的起源をめぐる議論を再評価し、現代における意義を指摘している。(3)は、近代ヨーロッパにおけるアーリア・モデルの形成を、インドも含めたより広い視点から分析しようとした議論である。これについては、後でさらに詳しく内容の検討をしたい。

(4)～(8)では、現代アメリカにおけるアフリカ系アメリカ人たちの歴史理解が問題にされ、それが、白人中心主義的な歴史のナラティブをいかに改変する可能性を持つかが、多様な観点から議論されている。すなわち、(4)では、奴隷制とその廃止をめぐる問題、(5)では、19世紀の教育制度をめぐる問題、(6)では、アメリカにおける黒人運動のガーベイズムや、ジャマイカのラスタファリアニズムをめぐる問題、

(7) では、1945 年以降の公民権運動をめぐる問題、(8) では近代以前のアフリカにおけるユダヤ文化との交流をめぐる問題がそれぞれ議論されている。

続く (9) では、以上と同様の視点から、サハラ砂漠以南のアフリカの知識人たちが問題にされ、彼らの議論が、『黒いアテナ』で指摘されたエジプトとギリシアの関係を巡る問題を、アフリカと地中海世界の歴史全体の問題に拡張する可能性を持つことが指摘される。

最後の (10) では、第一部のまとめとして、『黒いアテナ』で提示された論点が投げかける、新しい問題を三つ指摘しているが、これについても、後に詳しい内容の検討をしたい。

第二部「古典的ディアスポラ、ディアスポラの古典」

第二部は、「古典的ディアスポラ、ディアスポラの古典 (Classical Diaspora, Diasporic Classics)」と題され、12 編の論文が収録されている。

- (11) V. Y. Mudimbe, “In the House of Libya: A Meditation.”
- (12) Tim Whitmarsh, “Hellenism, Nationalism, Hybridity: The Invention of the Novel.”
- (13) Paolo Asso, “The Idea of Africa in Lucan.”
- (14) John H. Starks, Jr., “Was Black Beautiful in Vandal Africa?”
- (15) J. Mira Seo, “Identifying Authority: Juan Latino, and African Ex-Slave, Professor, and Poet in Sixteen-Century Granada.”
- (16) John T. Glimore, “John Barclay’s ‘Camella’ Poems: Ideas of Race, Beauty, and Ugliness in Renaissance Latin Verse.”
- (17) Brian H. Murray, “Lay in Egypt’s Lap Each Borrowed Crown: Gerald Massey and Late-Victorian Afrocentrism.”
- (18) John Thieme, “Not Equatorial black, not Mediterranean white: Denis Williams’s Other Leopards.”
- (19) Astrid Van Weyenberg, “Wole Soyinka’s Yoruba Tragedy: Performing Politics.”
- (20) Edith Hall and Justine McConnell, “Mytopoeia in the Struggle against Slavery, Racism, and Exclusive Afrocentrism.”
- (21) Emily Greenwood, “Dislocating Black Classicism: Classics and the Black Diaspora in the Poetry of Aimé Césaire and Kamau Braithwaite.”
- (22) Tessa Roynon, “The Africanness of Classicism in the Work of Toni Morrison.”

これらの論文が主に取り扱う主題は、『黒いアテナ』の中心的主題である、古代の文化の伝播とその拡散（ディアスポラ）をめぐる諸問題であり、より幅広い視点から、多様な論点が提示されている。

(11) で論じられるのは、古代における「リビア」をめぐる問題である。Mudimbe は、この象徴的に構成され、境界も存在しない周辺地域名によって、古代人たちが、文明と野蛮の関係性や、植民に対する理論化に影響を与え、さらには、それがアフリカという概念の形成に影響を及ぼしていることを指摘している。

次の (12) ～ (14) は、紀元 1 ～ 3 世紀にかけての時代に、ローマ帝国支配下でのギリシア、近東、アフリカが、どのように文化の形成のために機能したかを解明している。

たとえば、(12) において、Whitmarsh は、バナールの功績を、ギリシア文明をめぐる問題を、政治

的な問題に転換したところに求めるが、その意義は、古代史におけるヨーロッパ中心主義を批判する言葉を、新しいレベルで与えたところにあると主張する。Whitmarsh は、このような視点から、ヘレニズム期における小説の誕生過程を問題にし、そこにすでに、ヨーロッパ中心主義の問題が潜んでいることを指摘しようとする。彼が取り上げるのは、19 世紀ドイツの古典文学研究者のローデである。ローデは、初期ローマ帝国期に現れた小説の誕生の原因を、それ以前に存在していた二つのギリシアの表現形式である、アレクサンドリアのエロティック詩と、ヘレニズム期の旅行記の融合のなかに求めようとする。そして、これに第三の背景的要素として、当時のいわゆる「第二のソフィスト」運動における文化相対主義の動きを想定する。このように、ローデにおいては、小説の誕生は、近東の影響をまったく受けることなく、むしろそれに対抗する文化の中から生じたものなのである。このような見方は、実は古代から存在しており、たとえば、ディオゲネス・ラエルティオスは、哲学だけでなく、そもそも人類の起源はギリシアにあると考えている。

ところが、Whitmarsh によれば、たとえば、アレクサンドリア出身の小説家 Achilles Tatius などは、そのような図式には当てはまるものではなく、ローデの図式は、ゆがんだものであるという。彼によれば、ギリシアの小説は、むしろ、ギリシアと東方地域の接触を通して生まれたものなのである。

(15) 以降は各論であり、具体的な人物や作品を題材として、この問題を検討する論考がまとめられている。

※

次に、以上の多様な研究の中から、筆者の問題意識に近い注目論文として、(3) と (10) を詳しく取り上げ、考察することにしよう。

① Partha Mitter, "Greece, India and Race among the Victorians."

この論文で取り扱われるのは、人種概念の形成に関する問題である。ビクトリア期の人々は、古代ギリシアをヨーロッパの白人の文明の先駆けと位置づけた。その過程は、バナールの著書の中心的なテーマの一つであったが、Mitter は、この問題をさらに別の視点から発展させようとする。すなわち彼は、古代エジプトと古代ギリシアの関連をめぐる歴史記述の問題を、当時の人々のインド理解の問題に拡張させていこうとするのである。そのために彼は、アーリア・モデルの基盤となる、アーリア人種という概念がどのように形成されていったかを描き出そうとする。以下、彼の描く図式を要約しよう。

アーリア人種という神話は、19 世紀中盤における人種理論の土台であった。人種という概念は、この時期に、生物学や人類学の発展に伴い生まれてきたものであり、進化論の提唱と普及に伴い、19 世紀には一般的な概念になっていった。その際の特徴は、身体的特徴の相違と、言語的・文化的相違の間に相関関係を想定することにあるが、Mitter によれば、この奇妙な発想を理解するためには、アーリア人種理論の形成に目を向けなければならないという。バナールが指摘しているように、19 世紀後半における、サンスクリットとヨーロッパの言語との類似性の発見が、エジプトの没落とインドの台頭をもたらした。古代ギリシアのヨーロッパ的なイメージ化と並行して、ヨーロッパ人たちは、北インド地方に、同じような神話を作り出そうとしたのである。

アーリア人種理論は、比較文献学の偶然の副産物として誕生した。1786 年に、東洋学者のウィリアム・

ジョーンズ卿が、サンスクリット語と、ギリシア語を含むヨーロッパの言語との類似性を発見し、それをインドヨーロッパ語族、あるいはアーリア語族と名づけたのである。(アーリアは、サンスクリット語で、奴隷に対して、自由人を表わす言葉であった。) そもそも、この段階で、言語的カテゴリーとしてのアーリアと、生物学的カテゴリーとしてのその区別は曖昧であり、やがてこの言葉は、人種的な区分を表わすものになっていく。このようにして、アーリア神話は、急速にヨーロッパに普及し、比較文献学は、民俗学や歴史学や地理学に影響を与えていく。アーリアという言語的カテゴリーは、人類学者によって、他の民族に対するヨーロッパ人の優位性を示すものとして、熱狂的に受け入れられていった。

論文の中で、Mitter は、文献学者のマックス・ミュラーの働きを強調する。ミュラーは、古代サンスクリットのテキストの編纂と校訂に貢献し、この流れに大きな貢献をしたが、彼は、単なる言語学的研究だけではなく、人種としてのアーリアという概念の形成にも大きな力を果たした。Mitter は、こうしたミュラーの働きをはじめとする、当時のヨーロッパでの論争を描き出し、バナールの指摘する古代ギリシアをめぐる歴史的動きと並行する、アーリア人種理論の形成過程の重要性を強調し、このような動きが、古代ギリシアの歴史理解に大きな影響を及ぼしていることを指摘している。

② Robert J. C. Young, "The Afterlives of *Black Athena*."

この論文では、『黒いアテナ』の取り扱う問題が、どのような新たな問題を引き起こすかを論じている。『黒いアテナ』の来世」という題名で、著者 Young は、『黒いアテナ』が死んだといたいわけではない。むしろ、彼は、『黒いアテナ』は新しい生を誘発し、生み出す力を持っていると考えている。すなわち、彼の論点は、彼の論じなかった多様な問題に、新しい光を投げかけるといのである。Young は、この論文の中で、その新しい生の可能性として、三つの論点を提示している。

1) まず、彼が指摘するのが、「エジプトイメージの操作」という論点である(175-183)。『黒いアテナ』において、バナールは、古代ギリシア文明の起源に関する「古代モデル」が「アーリア・モデル」にすりかえられていった経緯を詳細に解明した。Young は、この 19 世紀の古典学において起こったヨーロッパ的知の形成過程の分析を高く評価するのであるが、それと同様の現象が、19 世紀のエジプト学者たちにおいても見られると指摘する。彼によれば、そのさい、特徴的なのは、エジプト人やエジプト文化に対するヨーロッパの知の形成は、それと並行して形成されていった人種概念、とりわけ、黒人の位置づけと密接に連動しているという事実である。彼はさらに、その現象を、ヨーロッパだけではなく、アメリカでの社会的・政治的問題と関連づけ、より広い視点から、その意味を読み解こうとする。

当時のヨーロッパ人にとって、古代ギリシア文化は、完全にヨーロッパ的なものであるべきであり、ユダヤやエジプトの文化からの派生物であるべきではなかった。しかし、アメリカにおいては、この問題は、黒人奴隷の問題と密接に関連していたという。当時の問いの図式は、「アフリカ人は十分に人間といえるのか否か」という単純なものであった。この政治的な問いに関して、19 世紀の人類学においては、二つの答えが存在していた。すなわち、一つは、伝統的な聖書の教えに従い、人間はすべてアダムとイヴの末裔であり、したがって、すべての人間は平等であるとする単一発生説(monogenesis)と、主に気候的な違いを原因として、異なった人間すなわち人種が存在するとする多元発生説(polygenesis)である。アメリカの民族学者たちは、もしアフリカ人が白色人種と異なる種類ののであれば、人間という概念は白色人種のみにも適用され、奴隷制度は正当化されると考えた。Young によれば、アメリカでは、

このような事情から、ギリシア人だけでなく、エジプト人の「白人化」がなされたのだという。

Young がそのような試みの代表として注目するのは、アメリカの民俗学者 Josiah C. Nott と George R. Gliddon による共著 *Types of Mankind* (1854) である。Young によれば、この著作には、単にエジプト人は白人であったという主張だけでなく、アメリカの民俗学者がどうしてエジプトに注目したのかという事情がよく現れているという。すなわち、当時のアメリカの民俗学者たちにとっての問題は、聖書の記述（それにもとづけば、地球が誕生したのは、わずか6千年前にすぎない）と、環境的变化による人種の違いの発生という説明を整合させることにあった。彼らは、人間の頭蓋骨の計測の草分けである Samuel Morton の研究に従い、人類は四つの恒久的な人種（赤色人種、黄色人種、黒色人種、白色人種）に区分できると論じた（彼らはそれを「型 (type)」と呼ぶ）。そして、古代エジプトの人物像を、この四つの型に分類し、人種は、はじめから四つに分かれていたと主張したのである。さらに彼らは、フランスのエジプト学者シャンポリオンに従い、エジプト人たちは自覚的にそのような人種区分をする民族誌学を持っていたとまで主張した。こうして、彼らは、古代エジプトを、人種理論の科学性・普遍性を正当化するために利用したのである。

こうして、アメリカの民俗学者たちは、古代エジプトの図像から、人種のヒエラルキーのイメージを作っていた。そのさい、彼らにとって重要なのは、単にヒエラルキーの存在そのものではなく、エジプト人の図像の中で、アフリカの黒人たちがつねに奴隷として描写されているという事実であった。このようにして、Nott と Gliddon は、南部の奴隷制度は由緒ある制度であり、歴史的にも科学的にも権威づけられていると主張したのである。

2) Young が次に指摘しているのは、「地理的分類に対する影響」である。古代ギリシア人たちは、自分たちを「ヨーロッパ人」などとは認識していなかったし、自分たちがエジプト人たちや、現在では中東とか北アフリカと呼ばれる地域の人々と区別されるなどと考えてはいなかった。ところが、後の時代に形成された地理的区分の概念が、古典の世界に時代錯誤的に導入され、ヨーロッパ、中東、アフリカという名称で地域が分類され、分離された地域と認識されてしまう。Young によれば、バナールの指摘する古代ギリシアとエジプトそして中東との密接な影響関係は、むしろ、この地中海地域を陸と海を介しての文化的交流の地域として位置づけ、新たな認識をもたらすことに寄与するという。

3) 最後に Young が指摘するのは、「現代ギリシアにおける民族的浄化」という問題である。バナールの指摘する、ヨーロッパでのアーリア・モデルの形成と普及は、現代のギリシアに対しても重大な影響を及ぼし、ギリシア・ナショナリズムを引き起こしている。19世紀の近代ギリシアの独立において、このようなナショナリズムは、反トルコ、そして、イスラム的な要素の排除へと向かった。ギリシアの歴史は、いまだに単一的なものとして提示され、周辺世界との関係は切り離されており、ギリシアは、オスマン、アラブ、そしてエジプト的な過去の痕跡を消し去ろうとする。しかし、ギリシアがそのような要素を白人中心主義で消し去ってしまえば、地中海世界の相互交流の歴史もまた、消え去ってしまうのである。このように、アーリア・モデルは、単にヨーロッパとアメリカのアカデミックな世界だけで維持されているのではなく、ギリシアの攻撃的なナショナリズムの戦略によっても維持され、これからも生き残っていくのである。

5 おわりに

以上、われわれは、『黒いアテナ』論争の最新の成果といえる研究を詳しく振り返り、この論争で提

示された視点が孕む多様な可能性を検討した。古代地中海世界における多様な文化的交流と、それを通しての文化形成の実態は、バナールが批判したヨーロッパ文化中心主義の影響で、未解明な部分が多い。古代ギリシア人がどのように自己と他者を認識したのかという問題は、近代ヨーロッパがどのように自分たちの歴史的起源を理解しようとしたのかという問題と複雑に絡み合い、多様な問題を生み出していく。『黒いアテナ』論争が引き起こした新たな問題意識は、これからさらに多様な分野に広がっていくであろう。

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 25 年度～平成 29 年度）」によって行われた。